

小学校教員養成課程における〈性の健康〉教育のとりくみ
— 〈性〉をいのちと生き方の視点でとらえる教育をめざして —

木 全 和 巳

日本福祉大学 社会福祉学部

大 塚 あつ子

愛知“人間と性”教育研究協議会

新 崎 道 子

愛知“人間と性”教育研究協議会

村 瀬 桃 子

名古屋芸術大学 (非常勤講師)

Approach on <health of human sexuality> education at
the primary school teacher training course
— It aims at the education where <human sexuality> is
caught by the aspect of the life and the way of life —

Kazumi KIMATA

Faculty of Social Welfare, Nihon Fukushi University

Atsuko OTSUKA

The Aichi Council for Education and Study on Human Sexuality

Michiko SHINZAKI

The Aichi Council for Education and Study on Human Sexuality

Momoko MURASE

Nagoya University of Arts (part time)

Key Words : 性の健康, 小学校教員養成課程教育, 教材, 模擬授業, 意識の変化

目次

はじめに：「性の健康」教育の意義

第1章 模擬授業の実践を通して

1. 女の子・男の子のからだ（低学年の授業）
2. うまれるよ（低学年の授業）
3. おとなになりゆくからだところ（中学年の授業）
4. 人を「好き」になるってどんなこと？（高学年の授業）
5. いのちのつながり（高学年の授業）
6. いろいろな家族・様々な暮らし方（高学年の授業）

第2章 「性の健康」教育の歴史と学習指導要領の講義を通して

1. 学校教育における性の健康教育の歴史と問題点
2. 学校教育における性の健康教育の位置づけと体系

第3章 「性の健康」を深める

1. 現代社会と子どもたち
2. 性虐待・性暴力の対応と相談 養護教諭や児童福祉センターや保健所、医療関係との連携
発見・相談・援助・連携 予防教育とエンパワメント
3. ところとからだの主人公に ～障害のある子どもと「性教育」～

第4章 学生の取り組みを通して

おわりに：成果と今後の課題

はじめに：「性の健康」教育の意義

2007年度から愛知淑徳大学において小学校教員の養成が始まった。小学校の教員にも性と生の健康に関する授業や生活指導という実践ができる力という松田秀子先生からの依頼を積極的に受けとめ、大学2年生を対象として「性と健康」という半期の講義を行うことにした。

積極的に受けとめたのは、2003年7月の都議会で土屋敬之都議（民主）の質問で七生養護学校では「過激で不適切な性教育」が行われているとし、是正を迫ったことから始まった「ところとからだの学習」裁判などにみられるような性教育に対する不当な政治的介入が続いている中で、小学校の教員をめざす学生のみなさんに、「性と健康」の教育の意義と魅力を伝えたいと考えたからである。

講義のテーマは、「ところとからだの主人公になりゆく子どもたちと豊かなセクシュアリティを育み合うための性と生の確かな教育実践をつくる」とした。テーマの解説として、以下のような文章を綴った。

「小学校時代は、めまぐるしいところとからだは変化する時期です。小学校低学年では、男女いっしょに身体接触を含んだゲームができますが、高学年になっていくとお互いに異性（同性）を性的な恋愛の対象として意識しはじめます。こうしたところの変化は、初経や精通というからだの成長ともなっておこります。特に思春期前期の子どものところと

からだの発達のな特徴を学びます。子どもたちの認識の発達においても、具体的な思考から抽象的な思考の力を身につけていく時期と重なっています。こうした思春期の自分くずしと自分づくりに向けて大きく飛躍する中学校の時期の前段階となる思春期前期の高学年とその前の低学年というそれぞれの時期にどのようなところとからだの学習が必要であるかを学びます。

また、いま子どもたちの生きている時代には、家族の経済状況の格差も広がりもみられます。また、父子家庭や母子家庭などのひとり親家庭をはじめ、多様な家族のもとでの生活もしています。さらに、発達したマスコミの影響も大きく、性と生についても、商品化された情報の中で、子どもたちも保護者もまた教師も、どのような価値にもとづいて性と生を捉えたらよいかについて、混乱している状況もみられます。

「子どもの権利条約」にもとづく国連の子どもの人権委員会からは、人権侵害ともいえるボルノ情報と、過度の競争にさらされた日本の子どもたちのおかれた状況について、懸念が表明され、子どもたちは、自己肯定感が十分に育まれていないとも言われています。

こうした問題意識にもとづいて、この講義では、

「性の健康」と「性の権利」という価値を大切にしながら、男女平等（ジェンダーへの敏感さ）と多様性の尊重をキーワードにして、子どもたちとともにここからだの主人公になりゆく性と生の教育実践について、いっしょに模擬授業も受けつつ、体験しながら、教育をする力を学生につけていくことを目標にして、シラバスを作成しました。」

できるだけ一方的に語る講義は少なくして、学生たちに小学生になってもらいながら参加する模擬授業を多く取り入れた。また、スクールカウンセラーをはじめ、特別支援学校の元教員などの多様なゲストを迎えて、講義でつないでいく方法をとった。最後には、学生自身に、指導案を書いてもらい模擬授業実践を行った。

この論文は、私たちが行った15回の授業実践をふりかえりながら、「性と健康」の講義を小学校教員をめざす学生が学ぶ意義について、深めたものである。

(以上、木全)

第1章 模擬授業の実践を通して

ここでは、実際におこなった模擬授業を中心に、学生の感想も交えた内容を述べる。

1. 女の子・男の子のからだ（低学年の授業）

(1) 模擬授業の設定

低学年の児童たちは、自分のからだについて、興味関心はあるのだがきちんとした科学的情報を与えてもらっていない状態が大半である。すでに、性器に対してマイナスイメージを持っており、「いやらしいもの」「はずかしいもの」と捉え、「エロ」「エッチ」という言葉もよく聞かれる。この授業は、小学校に入って初めて学ぶ「性の健康教育」である。その第1歩は、「からだっていいな」というからだ観を養うことだと考える。自分のからだは「大切なんだ」という肯定的な見方ができるようにすることである。そこで、外性器も含め私たちのからだにはそれぞれ名前・つくり・はたらきがあることを理解すること、2つ目に性被害の防止という視点から、自分だけの大切な場所（プライベートゾーン）について理解するとともに、自分のからだを大切にしていこうとする気持ちを養うことを目標に設定した。

本授業を始めるにあたって、小学校の低学年がどういう時期か簡単に理解してもらうために、性的発達段階に視点をあてて幼児期より低学年の実態及び、性の健康教

育の押さえるべき点についても説明をした。

(2) 模擬授業の実践——2008.10.08 実施

この模擬授業という学習形態は学生にとって初めてであるということ、そして低学年の児童になりきることの難しさなどからアイスブレイキングをして気持ちが和んでから授業に入っていた。最初、戸惑った学生もいたが、授業には楽しく参加できたようだ。模擬授業は、指導案にそってほぼ計画通りに進んだ。

授業の目標

- ・外性器について、名前・つくり・はたらき・成り立ちを理解することができる。
- ・プライベートゾーンを理解し、自分のからだや性器を自分のものとして大切にしていこう気持ちを養う。

授業の流れ

つかむ からだの名前あてゲームをしながら、からだにはいろいろな名前が付いていることを確認する。

深める 2体の人形を使って、外性器は男女によって違うことを学習する。

「ちゃんと ちゃんです。どちらが女の子で、どちらが男の子でしょう。」

学生は、さまざまな理由をつけて予想するが、決定できない。そこで、裸になればいいという意見がでてくる。次に服を脱がせるわけだが、人形に必ず「からだ勉強のために服をとって、見せてもらってもいいですか。」と尋ね、「いいって。」という返事をもらってから脱がせることが大切である。また、「みんながパンツを脱ぐのは4つのときだけだよ。」と確認する（1つ目はトイレ、2つ目はお風呂に入る時、3つ目は着着に着替える時、4つ目はお医者さんに見せる時）。

性器にも名前があること……外性器に関してはいろいろな呼び方があるが、ここでは男の子はペニス・せいそう、女の子はワジナという言葉を示す。

広げる

紙芝居「ちんちんのはなし」を見る。
外性器のつくりとはたらき、男性器も女性器も元は同じだったことを知る。
性器は一人ひとりみな違うことを知る、男女二分法ではない考え方を知る。

プライベートゾーンを知る……プライベートゾーンは水着で隠れる所と口と説明した。人形図で確認をし、それぞれ図に水着を書き込む作業をしたが、一部の男子学生は、男の子の水着という理解でパンツの部分のみに色を塗っていた。男の子も女の子と同じ部分をプライベートゾーンということを確認した。

まとめる 外性器は女の子と男の子とちがうこと、からだは性器も含め一人ひとりみんなちがうこと、プライベートゾーンは自分だけの大切な場所であること。

(3) 模擬授業の考察と課題

本講座最初の模擬授業ということで、導入部分には気を使った。特に、小学校の低学年になりきることは大変難しい。生活の中に小学生と出会う経験のない学生にとっては特に難しいことだと思う。そこで、ゲームやスタッフに小学生に成りきってもらって仕掛けを作りながら、授業を進めた。学生の感想でもわかると思うが、大学生に戻ったり小学生になったりと、揺れ動きながらの参加だったようだ。

低学年の授業は、子どもの注意を教師にむけさせたり、集中力を持続させたりするために、言葉かけや教材の工夫は重要である。学生にはその独特の言葉かけが参考になったようだ。例えば、からだ学習を始める時の約束ごとである。「からだの学習のときはお医者さんのような科学者のつもりで勉強してください。科学の話は命を守ることにあります。科学者はわあーっとさわぐのではなく『なるほど』とか『うんうん』と言います。」この約束事は、授業の途中で教室が「わあーっ」と騒がしくなったときには大変有効である。

授業で使った紙芝居では、言葉の使い方が問題になった。紙芝居は題名が「ちんちんのはなし」で「ちんちん」という呼び方で出てくる。紙芝居を読むときは、一部「ペニス」と呼び変えたが、名称が2つ出てきたことに戸惑った学生もいた。はじめて教わる言葉に関しては、配慮を十分にする必要を感じた。

(4) 学生の感想

今日の模擬授業は低学年対象だったのですが、学生の私が受けても魅力ある授業だったと思います。しかし、低学年のようにふるまえなかったので次回からは対象

学年になりきって授業を受けたいです。さて、模擬授業の内容についてですが、子どもに、自分の大切なからだを考えてもらうためにお約束事として「科学者のつもりで勉強しましょう」と指導した方法は子どもたちが納得できて、「今から大切な授業をするんだ」と意識を向けることができると思いました。また「ちんちんのはなし」の紙芝居を取り入れることで、子どもたちが集中してちんちん（性器）の違いについて学ぶことができたと思います。低学年の子には様々な教材を通して学ばせることが大切だと思いました。

低学年のための性の授業は、性被害を防止するためでもあるということがわかった。そして、プライベートゾーンは性器だけでなく、口や耳なども入ることに驚いた。子どもたちを静かにさせる方法も勉強になりました。参考にしたいと思います。

今日、大塚先生の授業を受けて、一番感じたことは、自分がはずかしがっているのは絶対に性教育の授業はできないなと思った。自分が小学生の時、「こんな授業を低学年で受けたっけ」というくらい記憶にない。小学5年生のキャンプの説明会の後、女子だけ残れと言われ月経の話聞いたことを思い出したが、今思うとなぜ女子だけに男子に隠すようなことをしたのかと疑問に思う。

はじめて、模擬授業を受けました。1年生になりきって質問したり答えたりするのは難しかったけど、すぐわかりやすくなるようになりました。最初はプライベートゾーンに何で口が含まれているのだろう、お医者さんにはよく見せるのにと、疑問でしたが口が性感帯の一部であることもわかりました。男子 ペニス、女子 ワギナと一般的に言うことを習いましたが、ペニスとワギナを合わせていうときは「ちんちん」や「性器」と言えばいいのですか。子どもたちに騒いではいけないときの注意の仕方なども勉強になり、私も児童が納得できるような教え方ができればいいなと思いました。

2. うまれるよ（低学年の授業）

(1) 模擬授業の設定

低学年の児童たちは、自分の小さい頃の話をするのがとても好きである。生活科で、自分でできるようになったこと等を話し合う時も「小さい頃はこうだった、ああだった」と、話は大いに盛り上がる。そして、自分は生まれる前、お母さんのおなかのなかにいたこともある程

度は理解している。しかし、「自分の生命はどうやって始まったのか?」、「自分はどのように生まれてきたのか?」など、素朴な疑問を抱えているのだが、きちんとした科学的情報を与えてもらっていない状態である。「いのちの成り立ち」や「いのちの誕生」を科学的に学習することによって、自分のいのちがかげがえのない大切なものであると感じていくことができると考え、本授業を設定した。

(2) 模擬授業の実践 —— 2008.10.15 実施

授業の目標

- ・男の人(父親)の精子と女の人(母親)の卵子が一緒になり、自分のいのちが生まれたことを知る。
- ・自分が母親のおなかの中でどのように育ち、どのようにして生まれてきたかを学習することにより、いのちを大切にしようとする気持ちを持つことができる。

授業の流れ

模擬授業、2回目ということであったが小学2年生になりきることの難しさから今回もアイスブレイキング(じゃんけんゲーム)をして気持ちが和んでから授業に入っていた。

つかむ 今の自分から生まれた日までをさかのぼる。赤ちゃん人形を見ながら、赤ちゃんのころを思い出す。

深める 紙芝居「わたしのたんじょう」を見る。
生まれる前の様子を知る。自分のいのちの始まりは、お母さんの卵子とお父さんの精子がであって新しいいのちができることを知る。

広げる おなかの中の様子について知る。
息は?ごはんはどうしていたの?おしっこやうんちは?
様々な疑問を、クイズ形式で進めていく。
生まれる時の様子について知る。
赤ちゃんが生まれる合図をだして生まれてくること。
初めて自分で呼吸をすること。

まとめる 自分はおなかの中でどのようにそだち、どのように生まれてきたかを整理する。

(3) 模擬授業の考察と課題

「今日は、生まれたばかりの赤ちゃんをつれてきたよ」

と言って、学生たちに赤ちゃん人形を抱っこさせていった。学生たちは、普段の生活の中で赤ちゃんに触れる機会が少ないようである。本物と同じようにつくられた人形を、「首が座っていないんだね」と、恐る恐るだっこしたり、「こんなに重いんだ」など、様々なつぶやきが聞かれたり、この赤ちゃん人形を授業の導入に使用することで、学生たちは一気に授業に集中してきた。大変有効であった。次に卵子、精子共に「赤ちゃんのからだを作る設計図が入っている」と説明。卵子の大きさを表わす紙(黒のケント紙に針で穴をあけたもの)を見て、最初の大きさを実感したようである。また、本授業は、初めて聞く言葉がたくさん出てくる。紙芝居で出てきたときに、新しい言葉はフラッシュカードを使って丁寧に扱い、授業の最後まで黒板に張っておくようにした。(せいし・らんし・子宮・へその緒・羊水)

児童の集中力を持続させるため、紙芝居をしながら、途中にクイズをはさみ、授業に参加できる配慮をした。このクイズに学生たちも盛り上がり、しばし小学生の立場ではなく学生として参加していたようだ。残念なことにも必ずしも正解というわけにはいかなかった。

クイズ1: あかちゃんのへその緒はどこにつながっているでしょうか。

クイズ2: へその緒を流れている血液は誰の血液?

クイズ3: おなかのあかちゃんは、おしっこをするでしょうか。うんちは?

「生まれる」のような誕生の授業をするときには、児童の家庭環境を配慮して行う必要がある。シングル家庭の子、別居している家庭の子、親と同居していない子などその環境は様々である。授業の中で、どのような言葉かけをしていくか、実態を把握しながら進めていかなければならない。今回の授業でも、配慮した言葉かけにきちんと反応してくれた学生もいた。生まれる時の様子については、「生まれてきた」ということ自体すごいことなんだ・生きるパワーがあることなんだということはいっかりメッセージとして伝えたい。

(4) 学生の感想

低学年に授業するときに、「男と女」という表現じゃなくて「お父さんとお母さん」という表現だったことや、今は一緒に暮らしていない場合もあると説明があったことはよかったと思った。でも、親が再婚していたりで生物学上の親でない親と暮らしている子どもはど

う思うのかな?と思った。どう配慮すればいいかも考え付かないし……。お父さんとお母さんが性交している紙芝居の絵はどう反応するか人によって違うのだろうなと思った。

へその緒が3本あって、1本は栄養をもらって、もう2本はいらぬものを戻すということを知りました。また、羊水 飲む 浄化して おしっことして出す、という一連の流れも、こんな小さい赤ちゃんががんばって生きようとしていることなんだと知りました。なにより、おなかの中で赤ちゃんは生きようと必死にがんばっているんだということ、自分にもそういう時があったのだということに驚きました。自分にもいつかは赤ちゃんを産むときがくると思います。“命の重さ”を今からしっかり自覚しておきたいです。(へその緒に関して、次時に補足説明をした。)

赤ちゃんが持っている機能、役割のすごさに驚いた。以前、某芸能人が「30歳を過ぎると羊水がくさる」という発言でとても大きな問題になったが、その重要さを今日初めてわかった。卵子の小ささにも驚いた。とても勉強になった授業だった。

今日の授業は本当に赤ちゃんにはすごい力がたくさん秘められていて、ただただ感心しっぱなしでした。20年も生きてきて、私自身もお母さんのおなかの中から生まれてきておなじ道を通ってきているのに知らないことだらけでした。羊水を飲んできれいにしてから自分で排せつしたりお母さんに生まれる合図をしてから生まれてきたり、赤ちゃんってすごいです。今の私よりもはるかにすごい力を持っていて頭がいいと思いました。私は生まれてきたとき仮死状態でしたので、今こうして生きていられることに感謝して生きていきたいと思いました。

本当に知らないことだらけだなというのが率直な感想です。低学年向けの授業を受けているのを忘れていました。グループでの話し合いでも疑問がたくさん出ました。赤ちゃんのもっている力のすごさ、しかもそれは自分たちもやっていたのだと思うと不思議な気持ちになりました。私は逆子だったので、どうして回れなかったのだろうなど考え、自分のことを大切にしようと思うきっかけになる授業だなと思いました。

今日の授業は、自分の知らないことがたくさんあり、小学2年生の児童を演技する自分を忘れ、大学生として感心しながら授業を受けました。赤ちゃんは生まれ

るためにお母さん以上に頑張っているなと思いました。さて、模擬授業の内容についてですが、はじめに「赤ちゃんを抱いてみよう」ということで、児童1人ひとりに赤ちゃんを抱かせてもらったのですが、抱けなかった子に対して「抱けなかった子は授業の後にね」と、どの子にも抱けるように配慮ができていると思いました。また、いろんな子の意見を聞くために、先生が動き回って子どもの意見を聞いて授業に取り入れているなと感じました。

(以上、大塚)

3. おとなになりゆくからだところ (中学年の授業)

(1) 模擬授業の設定

学習指導要領の保健では、「(2) からだの発育・発達について理解できるようにする」として、小学3・4年時に思春期前期(精通・初経)の学習内容を取り扱うようになっている。そこで、『おとなになりゆくからだところ (1) (2)』というタイトルで模擬授業を組み立てた。主な内容は以下のとおり。

模擬授業 [その1] で

- ・赤ちゃんから子ども、子どもから大人へ 人の育ち方
- ・二次性徴 = 思春期ってなあに?

模擬授業 [その2] で

- ・初めての射精 = 精通 その仕組みと働き
- ・初めての月経 = 初経 その仕組みと働き
- ・からだやこころの育ち方は人それぞれ

小学中学年という時期はかなり幅広い発育状況にある。体格・心理共に低学年に近い状態の子どもから「6年生?」、体格だけなら中学生と見間違ふ子どもまで実に個人差が大きい。思考や認知においてもまだまだ具体物を必要とする、抽象化獲得への準備段階にあるといえる。また、からだところ = 性の学びでは自らのこと = 当事者性の意識が欠かせない。そこで、模擬授業の組み立てにおいては、学習内容の設定や活用する教材・教具をより具体的で身近なものに工夫した。

(2) 模擬授業の実践 —— 2008.10.29 実施

授業の目標

- ・誕生 育ち 成人 死というヒトの一生を見つめなおし、いのちの始まりと終わりやいのちの連綿とした繋がりを、自分のからだところを通して感じ取

る。

- ・ヒトの育ちの中で、小学校中学年は思春期前期にあることを知り、二次性徴についてからだところの科学的な知識をもつ。

授業の流れ

つかむ ヒトの一生（人生）テープ上に、影絵で表現したヒトの育ちカードを育ちに従って並べる。

深める 自分はテープ上のどこになるだろう？家族の位置は？先生や知り合いのおばあちゃん、おじさんは？

誕生 育ち 成人 年を取る 死を概観
することを通していのちをみつめる。


広げる 親から子、親から子へといのちは繋がっていく。いのちのボタンタッチは育ちカードの中のどこでなされるのだろうか。（成人男女の性交 受精=いのちの始まり）

では、私たちは？……大人になっていくためにからだところが変化し始める時期にあることを知る。（思春期前期、二次性徴の用語を知る。）

まとめる 二次性徴の中で特に内性器の変化（精通と初経）について、大まかな知識を得る。

教材の工夫

ヒトの一生（人生）テープ

1年を10cmで表した8メートル超の手作りテープ。子ども時代と成人時代を2色で色分けしてある。10歳から20歳の間（思春期）は、対角線で2色がぬり分けられている（このような形態  である）。

ヒトの育ちカード

0才児、幼児、6・7才児、10・11才児

中学生から高校生、成人の育ち段階にある男女1対になった影絵の手作りカード。

二次性徴発現の模式図絵

男女児2体の図絵 アーニ出版のセット教材の中から二次性徴の説明に関するもの

脳下垂体、内性器（精巣と卵巣）、性腺刺激ホルモン、男性ホルモン、女性ホルモン、外見的な変化を図絵化したカードなど。

(3) 授業後の考察と課題

個人差の大きい思春期前期という発達段階にある子ど

もたちに、「二次性徴」を自分のこととしてかつ肯定的に受けとめてほしいと願っている。そのために、誕生から育ち 成人 長い人生 死というヒトの一生を、8mを越す長いテープと育ちカードで見つめなおし、自分たちの育ちの位置を具体的にテープ上で確認する活動を設定した。9・10才の自分たちは、これから大人に向かってからだが大きく変化し始めるんだということや成人してからの人生がとてつもなく長いこと、だから思春期の10年はあわてずゆっくりでいいことなどを実感でき有効であった。二次性徴の学びは、特化して“点”的に学ぶのではなく、人として生きる自分の大切な発達の一段階として期待と自信へつながる学びでありたい。

2つ目の目標「二次性徴についての科学的な知識をもつ」に関しては、いくつかの重要な問題が出てきた。外見上見聞できる二次性徴（男女の体つきのちがい、発毛、乳房、声がわりなど）についてはスムーズにあげることができたが、内性器に起きる二次性徴となるとまず『用語』でつまづいた。脳下垂体、性腺刺激ホルモン、男性ホルモン、女性ホルモンなど、二次性徴を引き起こす仕組みの説明に欠かせない用語が、初めて聞く言葉である上に具体的にイメージしにくいのである。大学生でも“二次性徴”を“二次成長”と思いこんでいたくらいなので、『ホルモン』の正体や働きを用語と共に理解するのはきわめて難しいことなのだろう。実際、模擬授業後の感想に「中学年で二次性徴の学習は無理なのでは？」という意見や感想が多く出された。

当初の授業計画では、射精と月経について **その1** では簡単にふれる程度で、詳しい仕組みや働きについては **その2** でやる予定だった。しかし、用語に関する理解の混乱が大きかったので、急遽 **その2** の授業は対象学年を高学年として実施することにした。

(4) 学生の感想

ホルモンってすごいと思う。物体も何かよく分からないし、やっぱり不思議だと思うけど、すごく重要な働きをしていることはよく分かった。私は、小4の頃初経も知らなかったの、その頃にこの授業を受けていたら“何やる？”と思ったかもしれない。

今日の授業はいつもより難しかった。やはり、ホルモンというのがあやふやすぎて、しっかりイメージできないのが原因である。児童にこのような授業をする場合は、ホルモンをどのようにイメージさせるかが大き

な課題だと思う。また、二次性徴について絵を使ったり児童にカードを貼らせたりするのがよかった。影絵がとても上手だった。

ホルモンとは微量で働くものだとは知らなかった。逆に言えば、そんな耳掻き1杯程度で男と女の体が特徴付けられるなんて何か信じ難く、驚いた。

今日の授業の中で、まず「えっ!？」と思ったのは、『二次性徴』というプレートを見た時でした。私はずっと『二次成長』だと思っていました。今日正しく知ることができてよかったです。

4. 人を「好き」になるってどんなこと? (高学年の授業)

(1) 模擬授業の設定

この授業の副題は、「～豊かで安心な人間関係作り」としている。思春期のころの変化として顕著化してくる「特定の人を好きになる = 恋愛感情」に目を向け、自分のところとからだも相手のところとからだも大切にしながら、豊かで安心な相手との関係 = 距離感を考えさせることをねらって設定した。

テーマに関連する学習指導要領の内容としては5・6年保健で、

「(1) 心の発達及び不安、悩みへの対処について理解できるようにする」として、「ア：心は、いろいろな生活経験を通して、年齢に伴って発達すること。イ：心と体は、相互に影響し合うこと」等が示されている。(関連：小3・4年の二次性徴の中で、“……また、異性への関心が芽生えること”も指導内容として示している。)

子どもたちの生活の現実場面では、特定の人を好きになった相手にどう伝え、どんな関係性に育てようとするのか? という恋愛(失恋)を学ぶ = 恋愛(失恋)学習の機会は少ない。むしろケータイ・インターネットを介した大人社会の擬似恋愛の害毒に晒されているといっても過言ではない状況にある。そこで、この授業の目的を次のように設定した。

- ・「あの子が好き! 気になる!」などの恋愛的感情に気づき、向き合い、互いに相手を大切にしながら自分の気持ちを伝え合う態度や方法を身につけようとする。
- ・性や性のあり方は、男女の二分法ではなく、「心の性」や「社会的性 = ジェンダー」もからんで多様

あること。また、多様な性のひとつひとつに優劣はないことを理解し、対等で豊かな関係性を築こうとする。

(2) 模擬授業の実践 —— 2008.11.12 実施

授業の目標

- ・「あの子が好き! 気になる!」という恋愛感情に気づいたり向き合ったりする中で、相手を大切にしながら自分の考えや気持ちを伝える態度や方法を身につける。
- ・「あの子が好き! 気になる!」という恋愛感情は、性別にとらわれず起きることを理解し、多様な性や性のあり方に気づく。

授業の流れ

つかむ

- ・『赤い実はじけた』(名木田恵子作, PHP 研究所, 1999.4) の読み聞かせを通して、「あの子が好き・気になる」という恋愛感情の芽生えに目を向ける。
- ・この「好き!」という気持ちは他の好きとどう違うのか? 話し合い、「特定の人ともっと仲良しになりたいという気持ちではないか。」ということに気づく。

深める

- ・「『あなたのことが大好きです。』と告白されたが、その人のことを嫌いではないけど“好き!”とはいえない気がする。どうしたらいいだろう。」という相談内容をもとに、相談した人にどう返答したらよいかをグループで話し合う。

広げる

- ・グループで話し合った返答を発表し合い、他のグループの考えや意見を知る。
- ・相手に届くように「断る = 自分の気持ちを伝える」大切さに気づき、断り方のロールプレーをする。

まとめる

- ・「あなたが好き!」という気持ちをもったり相手にそう言われたりした時、自分ならどう相手に関わっていくかを考えてまとめる。

教材や手法の工夫

読み聞かせ教材：赤い実はじけた

“赤い実”は、好き! = 恋愛感情の象徴。

その実が突然はじけたとは、思春期に突如湧き起こった好き! = 恋愛感情の発露の実感を意味している。

この話を read した後、あるクラスのアンケート結果 2 種類を提示する。

A：わたしの赤い実！ 今どうなってる？

B：人を好きになったらどうしたい？

A の提示を受けて、「自分の赤い実」のあり様を確認する活動に進む。B の提示内容に次の「相談活動」につながる「好きな人ができたら告白したい。」が入っている。

相談内容：あなたのことが、大好きです！

この大好きは、「恋こがれる = 1 秒だって忘れたことがない気持ち」であることを補足する。

相談をしてきた人、相談された人、また告白した相手の性別は特定しない。(グループの話し合いが必要ならそのグループで決める.)

大好き！と告白された人 = 相談者自身の気持ちは、「嫌いではないけど、好き！とは言えない気持ち」であることを押さえさせる。

ロールプレイング

告白した相手に、相手の気持ちも考えながら「断る」こと。

自分の気持ちを大切に、相手に届くように伝えること。

(3) 授業後の考察と課題

特定の人を性的意味合いが含まれた“好き！”になることは、心の二次性徴ともいえる。この感情は、これから将来に向けて、特定の人と親密で安心な関係を築いていく時の土台になる大切な気持ち = 心である。“犬より猫の方が好き。”とか“お風呂にゆったり入るのが何より好き。”等の好きとは違う“好き！”であることを実感的に理解してほしいと思っている。今回用いた「赤い実はじけた」は、小学 5・6 年生にとって自分の気持ちに出会えるとてもすぐれた教材である。授業ではこの教材をもとに、あるクラスのアンケート結果を提示して、更に“赤い実”を身近にしていって、当事者意識が高く活発で楽しい授業となった。

相手の気持ちを考えて断るというロールプレーでは、「断る」ことの難しさをしっかり味わっていた。子ども達の実生活場面でもイヤというより曖昧にしたり迎合したりすることが多い中で、「断る」練習は大切である。

(4) 学生の感想

今日の授業を受けて、初めて人を好きになった頃のドキドキした気持ちを思い出しました。そういう気持ちになることはおかしいことではなく、大切なことだということを子ども達に教えることはとても大切なんだなあと思いました。

ロールプレイングをやってみて、相手を傷つけない断り方は結構難しく、自分自身告白して断られるより、告白されて断った方がショックは大きいなと思った。恋愛感情を言葉で表すのは難しいから、赤い実はじけたという表現はいいなと思いました。でも、男同士、女同士の告白のロールプレーをしたら今の小 6 の子達はどんな反応をするんでしょうか？私達の頃はそんなこと考えもしなかったから興味があります。相手を傷つけない断り方は、考えても考えても、これだというのが思い浮かばなかった。やはり、断ること自体が相手を傷つけてしまう行為だし、それでも傷つけないように……なんて難しい。告白した相手の勇気を認めることが大切な。

(以上、新崎)

5. いのちのつながり (高学年の授業)

(1) 模擬授業の設定

本主題「いのちのつながり」では、「いのち」は連続とつながっていること、そしてわたしたちはどのようにしていのちをつないできたかということ、つまり性交・受精・誕生・成長・老・死という「人間の一生」の流れを視野に入れながら、その「いのち」を次世代につなぐための方法や身体的しくみについて科学的に理解させたいと考えた。

また、低学年の「うまれるよ」では、自分は生まれる側の立場で授業を受けている。しかし、高学年になり、自分のからだの変化を自覚し始めると、生まれた側の視点から産む側の視点に立つことができるようになり、当事者性も高まってくる。つまり、自分も新たないのちを紡ぐ立場になりうることに気付かせたいと考えた。

(2) 模擬授業の実践 —— 2008.11.26 実施

授業の目標

- ・自分のいのちは多くの命が紡がれてきた結果であることを知ることにより、いのちのもつ不思議さ、おもしろさ、奥深さを感じ取り、いのちを大切にしよう

うとする気持ちを持つことができる。

- ・いのちのはじまりについて性の仕組みや意味を科学的に理解することにより、いのちの尊さに気付かせる。

授業の流れ

つかむ 「人生テープ」で今の自分の位置を確認する。

10年を50センチとしたテープで人の一生を概観させた。

今の自分たちの位置 = 思春期がどこに位置するか、そして時間をさかのぼった誕生・受精の時期も確認をする。

深める 「わたし」につながるいのちのバトンタッチについて考える。

わたしにいのちをくれた人.....2人
父母にいのちをくれた人.....4人
祖父母にいのちをくれた人.....8人

と説明しながら父・母のカードを黒板一杯にどんどん貼っていく。

広げる わたしたちはどのようにいのちをつなげてきたのかを知る。

- ・受精について
- ・体外受精から体内受精へ進化していった様子を知る。
- ・動物は「交尾」、ヒトは「性交」というが、なぜ違った言い方をするのかグループで話し合いをする。
- ・「ぼくのはなし」のビデオを見る。

まとめる 児童の家庭環境に配慮しながらまとめをする。

(3) 模擬授業の考察と課題

「父」「母」のカードを黒板一杯に貼っていく。児童同様学生にも声が上がります。すごくたくさんのいのちがつながって今の自分がいるということを実感することができる。10代前までさかのぼると1024人、総計は2046人と数字でも説明。そして、一つのカードを取って、気付くことを話し合う。一人でもいないと「わたし」は存在しないこと、たくさんのいのちがつながって今の自分が存在していることに気付く。そして、自分もいのちをつなげていく立場になることもあることにあらためて気付く。そういう意味で、このカードは大変有効であった。

しかし、この「父」「母」のカードを「男」「女」にするかどうか準備段階でかなり迷った。「父」「母」には様々な意味がついてくるため、児童の家庭環境等を考えると説明が必要になり、「男」「女」にしたほうがいいのではないか。しかし自分のいのちのつながりを実感させるためには「父」「母」のカードのほうがいい。今回は迷ったことも含め、最後に学生たちの意見を聞くことにした。

次に、性交・受精をどう説明していくかである。5年生理科では、受精からの説明になっている。しかし児童たちの疑問「どうすれば卵子と精子が合体できるの？」に答えることはできない。今回はその疑問に答える形で授業を組み立てた。(受精の意味の確認 体外受精から体内受精へ 精子は動けるけど空気にふれるとしんでしまう。卵子は動けない)「どうしたらいいだろう?」という設問に児童たちはわりとスムーズに「直接卵子のもとへ精子を届ければいい」と回答をする。そして、多くの身近な昆虫や動物の交尾の様子を確認し、ヒトの場合は性交という言葉も教えた。その後なぜ、ヒトは「性交」といい、動物とは違った言い方をするのか? ヒトとはなぜ性交するのか? グループ討議(大学生の立場で)をしていった。最初の発問を補うという形で、次の発問をしてしまったため混乱が生じた。大学生なので、2つの発問にそれぞれ答えていたが、この授業の重要な発問だけに今後再考する必要があると感じた。2・3のグループの紹介をする。

- A : 交尾は子孫を残すためだけ、性交は感情や気持ちに伴っている / ふれあいたいから、好きだから、もっと相手を知りたいから
- B : 子孫を残すためだけかそうではないか / こどもがほしいから、愛を深めるため
- C : 交尾は子孫を残すためだけのものだが、性交は愛情を深めるためでもある / 触れたいから、お金を稼ぐ、欲求を解消するため、快樂.....など

(4) 学生の感想

父母のカードを1つ取って気付くことを話し合うのはいいなあと思いました。お父さんがいなかったら私はいない、お母さんがいなくても私はいない。おじいちゃん、おばあちゃん.....まではわかりやすいけれどそれ以上は想像しにくいと思います。でも、カードをはずすと、そこでバトンが渡せなくなってしまうので、とてもわかりやすかったです。家系図をたくさん書いて

1人の人がいなかったらと、上からたどっていくと何人の人が存在できなかったのか目で見ること命の大切さを実感できる。

今日の授業や教材は子どもたちだけではなく、私たち大学生にも大切なことを教えてくれるとても素敵な授業だったと思いました。どうやって自分たちが生まれてくるかは段階をふめばわかることだけど、お父さんお母さんに感謝して今自分が生きることの大切さを改めて気付かされたように思います。私は父・母のステッカーで説明したほうがいいのではないかと思います。その二人の子どもとして、自分がいるということが見て、受け取れるからです。

「父・母」「男・女」は、次のビデオで「父・母」となっているし、子どもの側からすると、父・母のほうに馴染みがあるので「父・母」のほうがよいと思いました。ビデオをみて、とてもわかりやすく“ぼく”が自分を大切にしていこうとわかったので良かったです。「ひとはなぜ性交をするのか」年齢が上がり、経験した子が増えてくるとこの問いの答えはむずかしいと思いました。愛を育む、子孫を残す、性交と交尾のちがいについて話せてよかったです。他の動物も似た形での交尾をしていて驚きました。

“父・母”にするか“男・女”にするかについては確かに簡単には決められないなと思った。「私にはお父さんいないよ。」などと言ってくる子どもも絶対いるはず。それは、離婚だったり亡くなってしまったりといろいろあると思う。“父”や“母”をどう定義するかによって、この表記は変わってくると思う。「今一緒に住んでいる男女」を指すのか「自分の誕生にかかわった男女」を指すのか、それは人や環境によって差がでてくると思う。私は家系図の前に「人が生まれるためには男と女が必要」ということを伝え、男女のシートを貼っていき、「この男の人はみんなのお父さんにあたる人だね。」などの説明を加えていく方法はどうかと考えた。

自分からみて20代上の父母の数など考えたことがなかったので、今日その数字を聞いて驚きました。父母、男女の問題なんですが、私は、男女と明記したほうが良いのではないかと思います。今、もし本当の父や母親と暮らしていない子どもにとっては、「私」のもととなった人を父母と呼んでしまうことでとてもつらい思いをさせてしまうのではないかと感じました。そ

の子にとって、父親だと思える人を父親と呼んでほしいから、この場合は「男女」として扱ってほしいです。

(以上、大塚)

6. いろいろな家族・様々な暮らし方 (高学年の授業)

(1) 模擬授業の設定

小6の子どもの現実には、その家族構成や家族関係、生活スタイルや生活時間等が様々に変化してきて複雑・多様化している。ただ、人々にとって「家庭」は、生きていく上での最小の不可欠基盤でもある。客観的な見方・捉え方が少しずつできるようになる小6というこの時期に、「家庭とは何か?」「様々な家族のあり様」また、「自分や家族を一步外から見なおしてみると……」等について考えたり知ったりすることは、意義あることと考えてこの模擬授業を設定した。

このテーマに関連する学習指導要領の教科・学年としては、小5・6年家庭科がある。その内容は、家庭生活と家族の単元で「(1)自分の成長と家族について、次の事項を指導する。」として、「ア自分の成長を自覚することを通して、家庭生活と家族の大切さに気付くこと。」となっている。以上の観点を踏まえて授業の目的を次のように設定した。(2時間完了)

- ・自分の性やジェンダー意識、外見や職業から性別を決め付けていないか?等を点検し、自分の中の性やジェンダーに関する偏見・差別に気付く。
- ・社会には、様々な構成の家族が存在し、家族の関係も生活のし方も様々多様であることを知る。
- ・親しい関係の家族間でも、気持ちや考えは言葉にして伝え合い、ぬくもりのあるふれあいが欠かせないことが分かる。

(2) 模擬授業 (2/2) の実践 —— 2008.12.3 実施

授業の目標

- ・家族やその一員である自分を、一步外から見つめなおし、様々な構成の家族がいてそれぞれの生き方・暮らし方をしていることを知る。
- ・親しい関係の家族間でも、気持ちや考えは言葉にして、相手に届くように伝える大切さがわかる。

授業の流れ

つかむ ・いろいろな家族の「絵」カードを見て、どんな家族なのかを考える。

深める ・想定家族とストーリーを基に、小6の子ど

もが主役の寸劇を作る。

広げる ・各グループの作った「家族」の寸劇を発表する。

まとめる ・発表をしたり他のグループの発表を見たりした感想を出し合う。

教材や手法の工夫

13種類の家族絵カード

典型的な核家族、一人親家族、3世代家族、一人暮らし、同性夫婦の家族、再婚同士家族、老夫婦……などの13家族の絵を用意した。実際の活動では、「台詞」を書いた吹き出しカードを配り、合う絵カードの上に貼ってもらった。

寸劇作り

提示された家族構成とストーリーを、小6の子どもが主役の劇にするという手法は、グループ活動が楽しく活発にできたことと授業の目標に近づく劇作りができて有効だった。

想定家族とストーリー

家族Aから家族Fまでの自作6通りを用意した。家族Cを示すと、

【(母、祖父、祖母、小6 小4の妹の5人家族)
母は離婚後、小さな会社ではあるが社長として精力的に働いていて、帰宅はいつも夜の9時10時である。祖父母は優しく、自分達子どもをよく見守ってくれている。2週間後にある最後の授業参観も、母はきっと無理なんだろうなあ?】

(3) 授業後の考察と課題

学生達にとって、「性の健康教育」の授業として、寸劇作りの手法を用いてこのようなテーマと目標に取り組む活動は初めてだったようで、どのグループも意欲的に楽しく活発な活動を展開していた。発表した「寸劇」も、提示された家族構成やストーリーをしっかりと話し合って理解し、小6の子どもの視点に立った劇に仕上がっていた。また、現代的な若者の感性を生かして、グループの役割分担に登場人物以外のナレーターや小道具・効果係も配して、グループ独自の主張を表現したグループもあった。

導入で提示された13種類の「家庭=家族構成と暮らし方」を見て、どんな家族なのか考える活動では、「こんな家族なら近所にいるな」「うーん、自分では理解できないけど多分いてもおかしくない」「こんな暮らし方

だったら自分もやってみたい」など、実生活と当事者意識から考えた様子が感想の中に読み取れた。

課題としては、学生達が教職について実際に、本模擬授業のような実生活と人権に関わるテーマの授業をしようとした時の問題である。楽しく活発な活動が出来るからのような安易な姿勢は許されない。学生の中には、授業後の感想でその不安を書いていた者もいた。そこで、次の講義時の振り返りで資料『一斉授業で“想定ストーリーに沿って模擬家族を演じる”活動で注意すること』を配布し、3つの観点事項を示した。

- ・クラス1人1人の児童の“現実”をきちんと把握し、クラスの実態と必要に合った家族構成やストーリーを提示すること。
- ・グループ編成やどのグループにどの模擬家庭を割り当てるかは、教師が考えと意図を持って的確に行うこと。
- ・寸劇作りの「3つの約束事」【進んで参加 他人の意見を大切に この時間だけのこと】

(4) 学生の感想

今まで「家族」と聞くと、当たり前のように異性の両親と子どもがいるものだと思ってしまっていました。でも、同性の親がいるということもあり得るのだと知り驚きました。わたしたちの班は、母と母の同性の恋人がいるという設定だったのですが、実際にこのような家族の場合、子どもはどんな気持ちなのかなと思いました。自分とは違う家族を受け入れる心を育てることが大切だと思いました。

本当にいろいろな形の家族があると思った。寸劇の中でどうしても子どもの気持ちよりも大人の都合が優先されているような気がした。だからこそ、子どもは自分の気持ちを伝えていかないといけないだろうし、大人はそれを読み取っていかないと行けないと思う。

家族には様々な形があって、様々な暮らしがあるのだと、今日の劇を見て改めて思った。私は母の役をしたが、子どもの面談にも行きたいが、それよりも恋人と一緒に過ごしたいという点を伝えたかった。子どもはとても悲しいし淋しい。しかし、母親も人であるからいろんな思いがあると思う。とても難しい問題だと劇をして感じました。

様々な家族構成や気持ち、考え方の複雑さを知るのに

寸劇をやるのは非常によかった。自分達で想像しながら劇を作り、より様々な家庭に起こる問題や想いを共有できたと思った。

(以上、新崎)

第2章 「性の健康」教育の歴史と学習指導要領の講義を通して

これまで日本で行なわれてきた「性の健康」教育はいかなるものであったか、そして現在はどうのような問題があるのかについて、教師として知っておく必要がある。そこで、学校教育における性の健康教育の歴史と問題点について、また学校教育、特に学習指導要領に焦点を当て、学校教育における性の健康教育の位置づけと体系についての講義をおこなった。以下はその講義の概略である。

1. 学校教育における性の健康教育の歴史と問題点

(1) 戦前日本で行なわれていた性教育

まず、日本で初めて性教育講演(単発)がおこなわれたのは明治時代で、富士川游という医者が、高輪中学の生徒(=男子)に向け、性的な問題を起こさないため、「手淫」(「自洗」,「自慰」,オナニー,マスターベーション)をさせないため、また「花柳病」(「性病」,性感染症)に感染しないためにその恐ろしさを講演した、といわれていること、また日本で初めて性教育講義(連続)がおこなわれたのは大正時代で、山本宣治という生物学者が同志社大学予科の学生に対しておこなったことを、解説した。

次に、資料(吉田英一『劇画山本宣治』機関紙共同出版,1989.3)をもとに、戦前の日本には公娼制度があり、1. キリスト教団体(廓清会や基督教婦人矯風会等)による廃娼運動が高まったこと、同団体は、2. 公娼制度は、一夫一婦制に基づく家族制度をおびやかすと考えていたこと、そして、3. この廃娼運動から、性教育(純潔教育のちに純潔[報国]運動)が派生したこと、4. 戦争が近づくにつれ、「純潔」(性道徳)が強調され、「花柳病」の害から青少年を守ることに関心がむくようになったこと、などを説明した。

また、避妊も墮胎もできなかった時代には「間引き」(嬰兒を殺すこと)がおこなわれていたが、明治になると「間引き」させないために「産婆」の仕事を規制(1868年「産婆取締規則」,1880年には刑法に「墮胎罪」

[施行は1882年])したこと、つまり人口増加(兵力・労働者)のため、「健康」な人間を必要としていたこと、換言すれば、心身が「健康」でない人を排除(例として国民優生法)していたこともつけ加えた。

(2) 戦後における教育政策としての性教育・純潔教育

日本で初めて教育政策としての性教育(純潔教育)が行われたのは戦後であり、その契機が、特殊慰安施設協会の設置(R・A・A協会, Recreation and Amusement Association, 1945.8)であったこと(つまり、一般女性の「純潔」を守る必要から、男性の快樂のために犠牲になる女性を盾にすること)、しかし性感染症の罹患率の高さからR・A・Aは活動停止(1946.3)となり、そこから放り出された者が「私娼」となったという背景を話した。そこで『私娼の取締並びに発生の防止、及び保護対策』が次官会議で決定(1946.11)され、この中の「『闇の女』の発生防止及び保護対策」中、「子女の教育指導によって正しい男女間の交際の指導・性道徳の昂揚をはかる為措置を講ずること」、「正しい文化活動を助成して青年男女の健全な思想を涵養するために措置を講ずること」が純潔教育として期待されたことを解説した。また、戦後、憲法が変わり、男女平等になったことで、小・中学校でも完全に男女共学になり、そこで、「正しい」男女交際のしかたを教える必要も考えられたことなども補足した。

しかし、戦前の廃娼運動を担っていたキリスト教関係者(矯風会等)が、戦後の純潔教育委員会(後の分科審議会)の委員となり、戦後の性教育に影響を与えた。それは、正しい性知識を教えるといいつつも、結局は「純潔」(性道徳)を守らせることを主眼とした純潔教育であった。教育政策として純潔教育がおこなわれるようになったにもかかわらず、性に関する内容に関する批判などもあり、結局は徐々に衰退してしまった。

(3) 近年における性の健康教育の動向

一方で、1972年に財団法人日本性教育協会(略称はJASE [The Japanese Association for Sex Education])設立、1982年には民間教育研究団体として「人間と性」教育研究協議会が設立されるといった新たな動きも出てきた。

1980年代後半になると、性教育が脚光を浴びた。その契機については、HIV/AIDSの感染が社会問題とな

り、対策が必要と考えられたこと、そして学習指導要領が実施された1992年、「性教育元年」といわれたことを説明した。

2002年には、『思春期のためのラブ&ボディ BOOK』の内容が批判され、回収されたこと、翌年の2003年7月、東京都の七生養護学校で、性教育教材が没収され、教職員が処分された。この「ジェンダーフリー・性教育パッシング」のねらいとは、からだところの主人公(わたしのからだは、わたしのもの)になることを否定すること(自分の頭で考え、行動する人間を育てることを否定し、自分の頭で考えず「権威のある」他人のことを素直に聞く人間をつくる)であると説明した。なお、七生養護学校「事件」をめぐる裁判について、元校長の金崎満氏が起こした裁判が勝訴したこと(2008年2月東京地裁判決、東京都は控訴)も知らせた。

(4) 学生の授業後の感想

学生の感想を見てみると、「赤ちゃんを産むのは女性なのに、女性に性に関しての権利が尊重されないような時代があったのはとても悲しいことだと思った」、「子どもに対して“性に対して嫌悪感をもつのはやめよう”というわりには、大人のほうが過激だ・不潔だと言って性を汚らわしいものだとらえている気がする。子供は大人のことをよくみている。親や先生が性のことをごまかせば、“この質問はいけない質問なんだ”と思いかねない。AVなどから知識を得る前に、大人の口から正しい知識を教えるのが大人としての義務であり、これから生きる子供にはその権利があると思う」というように、過去と現在の日本の性についての問題点を的確にとらえたものが多かった。

2. 学校教育における性の健康教育の位置づけと体系

(1) 「私たちの『性の健康』教育試案」創り

あらかじめ設定した以下のテーマを、小学校1~6年のどの時期(1学期・2学期・3学期)でやるかについて、「性の健康」教育の教育課程(試案)としてグループ毎に考えさせた。繰り返し学習したいテーマ、仮テーマにはないけれど必要なテーマがあれば付け加えることも可能とした。

精通(射精) 初経(月経) 二次性徴(からだの変化) 男の子のからだ(はたらきと名称) 女の子のからだ(はたらきと名称) プライバー

トゾーン いのちのはじまり 性被害 性加害
いろいろな家族(多様性) HIV/AIDS(性感染症) あかちゃんたんじょう(生まれる、という立場から) 性の多様性(性的マイノリティ)
恋愛(好きという気持ち) 生殖のはたらき(性交・妊娠・出産) 性(発達に関する)に対する不安、悩み いのちのつながり 家族とは?(役割、協力) 携帯、メール、インターネットのひろがり性とからだの清潔 思春期(こころの変化)

あるグループの試案を発表してもらい、グループで創った試案や、学習指導要領、「性の健康」教育試案(村瀬幸浩試案)を比較させた。本来なら幼稚園から高等学校までを見通した計画でなければならないこと、学習指導要領には「性の健康」という教科はなく、バラバラであること、そして、「性の健康」教育の教育課程には正解があるわけではないこと、つまり、「法律で定められている教育の目的や目標などを基盤としながら、地域や学校の実態に即した教育目標を設定する必要がある」(文部科学省『小学校学習指導要領解説 総則編:東洋館出版, 2008.8, p. 8)ことを説明した。

(2) 学習指導要領に関して

次に、学習指導要領とは、そもそも何かということの説明した。まず、「学習指導要領は、小学校教育について一定の水準を確保するために法令に基づいて国が定めた教育課程の基準」で、「各学校の教育課程の編成及び実施に当たっては、これに従わなければならないもの」(文部科学省『小学校学習指導要領解説 総則編:東洋館出版, 2008.8, p. 12, 下線は引用者, 以下同様)であること、しかし2003年から、「学習指導要領に示す教科等の目標、内容等は中核的な事項にとどめており、大綱的なものとなっているので、学校や教師の創意工夫を加えた学習指導が十分展開できる」(文部科学省『小学校学習指導要領解説 総則編:東洋館出版, 2008.8, p. 12)ゆえに、必ずしも学習指導要領に従わなければならないわけではないことを説明した。

学習指導要領の変遷について、戦前は国が教える内容を決めており、教師がいいなりにってしまったという反省から、敗戦直後の1947年にできた学習指導要領「試案」は、教師の参考・手引書(=拘束力なし)としてできたこと、しかし1958年の小中学校学習指導要領

の改訂案発表では、「試案」の文字がとれ官報告示され (= 法的拘束力をもつ)、学習指導要領にそって教育課程を編成 (文部大臣が作成権限をもつ) することになった。性の健康教育に関しては、1958年の小学校学習指導要領改訂で「性教育の位置づけが不明瞭」(山本信弘・大道乃里江・戸田百合子・小山健蔵・須藤勝見「性教育の歴史的変遷の文献的一考察」『大阪教育大学紀要 第部門』第39巻第2号, 1991.2) になり、中学校学習指導要領保健体育科では「成熟期への到達」が削除されたこと、1970年代からいわゆる「つめこみ教育」になったが、中学校の「学習指導要領」の改訂 (告示) 「『性教育』という文言や『性に関する指導』という表現は『学習指導要領』からはなくな」ったこと (平林宏美「性教育の現状と課題 () —— 性教育の変遷と現状 ——」『長野短期大学紀要』第50号, 1995.12) 等を説明した。なお、2003年の学習指導要領一部改定で、学習指導要領は「すべての児童に対して確実に指導しなければならないものであると同時に、個に応じた指導を充実する観点から、児童の学習状況などその実態等に応じて、学習指導要領に示していない内容を加えて指導することも可能」に (『学習指導要領の『基準性』』(文部科学省『小学校学習指導要領解説 総則編』東洋館出版, 2008.8, p. 10) なり、いわゆる「発展的な内容」を教えてもよいことになったが、「受精に至る過程は取り扱わない」とあり、「発展的な内容」を教えられず、学習指導要領自体が矛盾していること、さらに「解説」を読んでも、理由は不明であることを伝えた。

最後にまとめとして、子どもの現状に合ったカリキュラムを編成し、教材を選ぶ重要性を指摘した。

(3) 授業後の学生の感想

学生の感想を見てみると、「『性の健康』は科目はないけれど生活科や社会科で教えていけることに少しおどろきました。科目があったほうが教えていきやすいけれど、教師の工夫しだいでいろんなことができるのだなと思いました」というように、教師の意欲と工夫で「性の健康」教育ができること、「発展的な内容を教えてもよいのに、理科では受精に至る過程は取り扱わなかったり、大切なことを省くのは、矛盾していて、おかしいなあと思いました」というような現行学習指導要領の矛盾への気づき、また私たちの「性の健康」教育試案に関しては、「6年間でどう教えるかを考えるのは面白かったし、と

ても興味深かった。自分は『こうだ!』と思っけていても、他の人は全然別の考え方を持っていたりするので、自分の視野を広げるためにはよい機会だった」というように、グループで話し合いながら創るということもあり、それぞれの考え方の違い (子ども観・発達観) におり合いをつけながら作成していった様子を垣間見ることができた。なお、各グループで創った「性の健康」教育試案をもとに、何年生の何学期に、どのようなテーマの「性の健康」教育をするか、具体的に模擬授業を創ることを冬休みの課題とし、1グループが実際に模擬授業を行うこととした。これについては、第4章の「1. 学生がおこなった模擬授業」で述べることとする。

(以上、村瀬)

第3章 「性の健康」を深める

「性の健康」に関する知識をよりいっそう深めていくために、特別講師 (宮本信代・平田好実・渡辺武子の各氏) を招き、次のような講義や模擬授業もおこなった。

1. 現代社会と子どもたち

ここでは、若者たちを取り巻く性の状況と性情報の実態を知り、エイズを含む性感染症について学び、性行為における感染の可能性を考え、関わりについて考え、自分と相手を大切にすることを養うことを目標に、以下の内容を宮本信代氏に講義していただいた (08.11.19)。

(1) 若者たちの今

若者たちを取り巻く性の状況について、人と人とのつながりが衰えていることが説明された。つながりがないわけではないのだが、例えば携帯メールをすぐに返さないとかシカトされる、だから睡眠時間を削ってでも返信する、というようなつながりである。

一方で、若者たちは過激な情報 (インターネット...大麻の蔓延、出会い系サイト等) にさらされているという状況もある。

(2) 高校生の性に関する調査

高校生の性に関する調査 (愛知の私学27校, 5,570名, 男子2,983名/女子2,587名) から探してみると、以下の点が明らかになっており、これらから男女の違いに気づかせた。

性に関して知りたいこと	<女子>1. 性感染症, 2. エイズ, 3. 男女の心理や行動の違い, 4. 愛とは何か, 5. 相手との交際のしかた, 6. 避妊の方法
	<男子>1. 性感染症, 2. エイズ, 3. セックス (性交), 4. 異性との交際のしかた, 5. 男女の心理や行動の違い, 6. 愛とは何か
性に関する行動や意識に影響を与えたのは	<女子>1. 友人, 2. マンガ・コミックス, 3. 学校の授業
	<男子>1. 友人, 2. マンガ・コミックス, 3. ビデオ
悩み	<女子>1. 月経, 2. 乳房, 3. 外性器, 4. 交際
	<男子>1. 外性器, 2. 交際, 3. 性交, 4. 自慰

次に「セックス (性交) の経験」については、学年が上がるほど増える、男子より女子の方が多く、という傾向がある。ピア・プレッシャー (「やらはた」=20歳までにセックスの経験がない) の強さ、それゆえ経験が「ない」ことに焦る生徒に伝えることを示唆した。

性交の動機	<女子>1. 好きだったから, 2. 愛していたから, 3. 経験してみたかった, 4. 好奇心から
	<男子>1. 好きだったから, 2. 経験してみたかった, 3. 愛していたから, 4. 好奇心から

さらに、「セックス (性交) するとき」について、「妊娠が気になる...86%」、「エイズ、性感染症が気になる...81%」という一方で、「避妊を...いつもしている52%、場合による34%、いつもしていない9%」という結果が出ており、半数近くが避妊・STDの予防をしていないことを指摘した。

(3) 愛の12段階

ここで、性行動を考えるワークとして2~3人に1組でデズモンド・モリス「愛の12段階」の順番を考えさせた。このモリスの「愛の12段階」は、目から身体 目から目 声から声 手から手 腕から肩 腕から腰 口から口 手から頭 手から身体 口から胸 手から性器 性器から性器という順序である。ワークの後、この順序を示すと、日本の文化と異なる点もあり、どよめきもあったが、 ~ の段階を見ていくと、だんだん接触する面積が広がっていくこと、の段階に近づくにつれ、リスク (妊娠・性感染症) が高まること、同性同士のカップルもあること、 ~ のどの段階でも自分の意思でストップがかけられること、

自分の気持ちを率直に伝えることの重要性等を伝えた。

(4) 「水の交換」のワーク

次のワークは、性感染症について考えるワーク「水の交換」で、感染の広がりを感じてもらった。

まず、透明のコップを持って、輪になる (中身は水だが、いくつか水に見えるが薬品が入っているものを混ぜているので、服につけたり飲んだりしないように注意する)。次に、自分のコップの中の液体を醤油さしに適量な分量吸い取り、隣の人とお互いに交換 (液体を入れる)、一番遠い人と交換、好きな人と交換を行う。その後、薬品が混じった液体に入れると赤変する試薬を一人一人にいれていく。水の交換は性交を意味している。

なお、ここでは受講者40人中、初め4人に薬品入り液体を入れておいたが、3回交換した結果、16人に広がった。

(5) HIV・AIDSに関するデータ

エイズ患者・HIV感染者は、世界中で3,950万人 (2006年末現在の推定実数は、3,410~4,710万人の間)、アフリカの割合が多いこと、理由は貧困 (薬が入手できない、売春する子どもも...) であることを解説した。

一方、日本全国でのエイズ患者・HIV感染者は、増加傾向 (先進国では日本のみ) であること、私たちが住んでいる愛知県も増加傾向にあること、年齢構成は30~39歳 (37.0%)・20~29歳 (30.9%) が多いがこの人たちは10代で感染している可能性もあること (HIVの潜伏期7~8年)、また、感染経路は同性間 (48.9%)、男女構成は男性 (84.4%) が多いが、これは抗体検査をする人が男性に多いと考えられることを伝えた。

最後に、自分の問題として考えること、そして伝えること、教師として希望を語ってほしいということ、HIVの抗体検査の情報を伝えた。

(6) 学生の感想

最も反応が大きかったのは、「水の交換」のワークであった。例えば、「水の交換をして私は感染 (水が赤くなった) して、すごく怖くなった。たった一人の人としか性交していなくても、相手の人が他の人 (感染) としていたら、感染するかもしれないと聞いて、知ってはいたけれど、悲しい気持ちになった」というように、ワークをすることで感染の擬似体験ができたようだ。また、

「まだセックスしていない小学生や中学生の時に、今回のような授業を受けたかった」、「性行為をする場合は、あらかじめ HIV 抗体検査に行き、自分が感染していないことをお互いに確認し合うのが、本当に相手のことを大切に、思い合っていることだと思う」という感想を書いた学生もいた。

(以上、村瀬)

2. 性虐待・性暴力の対応と相談 養護教諭や児童福祉センターや保健所、医療関係との連携 発見・相談・援助・連携 予防教育とエンパワメント
本講義では、だれにでも起こり得ることを知り、二次被害とならないよう適切な対応と相談ができるようにする、学校内で抱え込まず、必要な機関との連携をスムーズに行えるようにする、予防教育とエンパワメントにより早期の発見や被害を最小限に抑えられるように心がけることを目標に、以下の内容を平田好実氏に講義していただいた。

(1) 暴力とは？

暴力とは必ず強いものから弱いものといった一方的な関係が固定して、閉ざされた空間にて起こる振る舞いで、強さと権力の表れであるとの押さえをしたあと、家庭内の暴力について詳しく説明した。夫から妻へ、彼から彼女へ。親から子へ（虐待としつけの違いについて）。子から親へ（これは家庭内暴力といって諸外国にはあまり見られない日本の特徴的なもの）。その他老人へ、きょうだい間、同居の親族間など。

(2) 性暴力、性虐待についての説明

- ・相手を思い通りにしたいと思う気持ち（支配欲）や自分の欲求を一方的に満たすために性的な方法を用いて、無理やり・強制的に行うこと。
- ・性差によって、非対等性・格差のある社会のため、性別と深く関係している。
- ・1998年「子どもと家族の心と健康」の全国調査から、小学生までの女子の6.4人に1人、男子の17.4人に1人が性交または未遂の被害を経験している。
- ・赤ちゃん、高齢者でも起こる。知人（上司・同僚・近所の人・友人・恋人・夫・父親・きょうだい等）から。自宅その周辺で起こる。
- ・レイプ神話……レイプはめったに起こらない。犠牲

者は、主に若い女性。男の気をひくような態度や身なりをした女性が刺激するので起こる。レイプは性欲がおこすもの。精神異常者。これらは「神話」であり、現実とは異なる。

(3) 「先生と児童のやりとり」のワーク

学校が児童虐待の発見の場になることはよくある。しかし、子ども自身が性についての教育を受けていないと被害とわからない場合がある。だから、教師は日ごろから児童の言動には細かい注意を払う必要がある。虐待が起こっているサインは言葉だけではないので、児童の身体症状・行動に急な変化が現れる場合を見逃さないこと。また、教師は日ごろから子どもたちと信頼関係を築いていくことが非常に重要となる。

児童の気持ち に焦点をあてて3場面のロールプレーをした。

先生は仕事をしている。「先生、先生。あのね……」を言っても仕事をしている。

- ・悲しい ・冷たい感じ
- ・もう一度声をかけてみようと思わない
- ・傷ついた ・もういいやという感じ
- ・自分には興味がないと感じた
- ・どうしていいかわからない
- ・お仕事忙しいのに、話しかけてごめんなさいと、いう気持ち

先生は仕事をしながら、「なあに？」と返事をしている。

- ・もう別にいいや ・さびしい
- ・冷たい感じ ・適当さを感じる
- ・自分より仕事を大事にしている
- ・相手にしてもらえてない感じがした
- ・「あー、やっぱりいいです」という感じで、話す気が失せた
- ・中途半端で聞いてほしくなかった

先生は、仕事を中断し、児童のほうを向き、笑顔で目を見て、「なあに？」と訊いた。

- ・聞いてもらえる喜びがあった
- ・じぶんが認められたと感じ、うれしかった
- ・自然に話そうと思った
- ・聞いてくれる姿勢で安心した
- ・いろんなこと話したくなった

(4) 発見・介入・予防等についての説明

特に、発見した時の聞くポイントとしては、話してくれたことをまずほめる。どんな場合でも「あなたは決して悪くない」と必ず言うこと。強制的に聞かないこと。忘れてはいけないこととして、今いるところが安全な場所かどうか確認することも大事である。そして、虐待は通告の義務があることなどを説明。

予防に関しては、教育(人権教育・性教育・感情教育)、自尊心を育む・高める関わり(子ども自身は切りぬける力のもととある、子どもは決して弱い存在ではないというメッセージを伝えていくべきである。)

(5) 学生の感想

性暴力や性虐待は、あまり身近に感じられないけど、それは被害者が簡単に他人に話せないからかなと思った。だからこそ、学校の先生など信頼されるべき人物は、子どもの話をよく聞いて、子どもの気持ちを理解しなければならなかったと感じた。どんな暴力でもいけないこと。被害者が相談できるような環境を作っていかなければならなかったと感じた。

暴力への対応がすごく勉強になった。たぶん私は、もし児童が少しでも話をしてくれたら、言ってくれるようになったらと思うとどんどん質問して聞きだそうとしてしまったと思う。でもいけないことが分かった。

虐待が起こっているサインというのは、普段の状態を知っていたり、見ていなかったら違いに気付けないと思った。気づかないとの違いかなと感じた。子どもが「先生、あのね・・・虐待されているの」なんて言ってくれるわけがない。言葉だけをとりゃいけないと思った。そして発見した時、起こったことを話してくれた時、先生の対応でその先が決まると思った。「信じるよ。ありがとう」の言葉が少しでも入っていたら「私話して良かった」と思うでしょう。教師は様々な対応の仕方を知りたいと思った。

(以上、大塚)

3. こころとからだの主人公に ～障害のある子どもと「性教育」～

ここでは、障害のある子どもの「性の健康」教育について、模擬授業も交えた以下の内容を、渡辺武子氏にいただいた。

(1) 内容

- ・日常生活の中での「性教育」(身近自立などに関わる中で)
- ・授業としての「性教育」(教科・領域の中で)

(2) 目標

- ・障害の種類や障害の軽重に関わらず性的存在であることが分かる。
- ・「問題行動」は発達要求であることが分かる。
- ・人間関係を構築するには、トレーニングがいることが分かる。
- ・自己肯定感を育むことの重要性が分かる。

(3) 講義の流れ

思春期を見通した「からだところ＝性」の学習とは？

二次性徴の発現と共にやってくる思春期は、子ども達にとって大嵐が吹きまくる人生の難関門。子ども達自身が思春期を発達成長上の大切な「過程」と理解し、自信と期待を持って乗り越える「力」を育てておくことは、私達大人(教師・親・社会)の側に課せられている教育課題である。

そのために、思春期を見通した「からだところ＝性」の学習は、幼児期の段階から具体的な認識とスキルと人間関係を育むことをめざして積み上げられていくことが大切である。

特に障害のある子ども達にとっては、からだや性についての認識やスキルの獲得、人間関係の把握や対応などの学びは難しいことが多い。したがってより個別・具体的にゆっくりと丁寧な方法と内容で進めることが大切である。

模擬授業 “わくわくからだ探検”

ア. 「歌遊び」でからだの部位の名称を知る。

イ. からだの各部位はどんな働きをしている？

(目隠しした状態で“もの”当てゲーム。)

ウ. 性器の名称とその働きを考える。

(おちんちんとおちんちん おしっこ、うんちが出る。)

エ. 性器など下着で隠れるところをプライベートゾーンということを知る。

(裸の自分の絵を書いた後、その自分に色紙の服を着せる。)

(4) 学生の感想

私達は授業で障害のある人のことを学ぶ時、「困っていることがあったら助けてあげよう」とか「声をかけてあげよう」と、どちらかというところからの目線で考えてきた。しかし、今日は障害のある人が「主役」というふうに考えることができた。視点を変えることができ、本当によかったです。

この授業を受けるまで、正直言うと私は障害のある人が性に対する正しい判断はできないんじゃないか、だから千葉県であのような事件が起こったのだと思っていた。この授業で私の考えが違っていたことが分かった。かれらも私達と同じように恋愛をしたいに決まっている。それならば、時間をかけてでもしっかり性教育を教えるべきだと感じた。

ハンディキャップをもった子ども達にも性教育が必要だと感じました。自分を肯定的にとらえる事は、私も正直余りできていません。障害をもった子ども達は特に否定的にとらえがちです。自分を好きになるためには、『～してはだめ!』ではなく『ほめてあげる』ことが大切だと思います。また、素直に自分が出せる人が一人でもいると心が楽になるんだなということに気づきました。

(以上、新崎)

第4章 学生の取り組みを通して

教員が行う模擬授業や講義を受けてばかりでは教師としての本当の力がつかない。そこで実際に、学生に指導案をつくってもらった。1. はその記録である。また、「性の健康」教育を受ける前と後で、学生たちの認識は変わったか否か。その効果に関しては、2. で見てみたい。

1. 学生がおこなった模擬授業

(1) 学生が考えた模擬授業のテーマ・対象学年・ねらい
 模擬授業は、8グループ(1グループ4~6人)で作成してもらった。各グループのテーマ、対象学年、ねらいは以下の通りであった。

テーマ	対象	ねらい
あかちゃんはどこからきたの?	低学年	自分たちが母親のおなかから生まれてきたことを知る。
あかちゃんたんじょう! ~ 生ま	2年生	私が母親のおなかの中でどのように育ち、どのようにして生まれて

れるという立場から~		きたかを知り、命の大切さについて気付くことができる。
男の子のからだ・女の子のからだ	2年生	・性器の名称・形・機能などを知ることができる。 ・男女で性器についての違いがあることに気付くことができる。 ・プライベートゾーンについて理解することができる。
スキってなあに?	4年生	おとなになりゆく1つの過程として、人を好きになることが、素晴らしいことだ、ということを感じ取らせる。
いろんな好きのかたち	4年生	好きという感情は男女間だけでうまれるものではないことを理解する。
思春期 ~ 人を好きになる気持ち ~	5年生	・思春期の目に見える体の変化と、目に見えない心の変化をとらえることができる。 ・相手を好きという気持ちには様々な形があることを理解し、大切にすることができる。
性の多様性	6年生	世間一般的には、体の性だけを取り上げ、体の性でしか考えず性を決めつけているが、性の多様性というのは「肉体的性、心の性、性的指向」の3つが複雑に絡み合っ成り立っていることを分らせる。
ジェンダーについて	6年生	自分たちがジェンダー意識を持っていることに気づき、ジェンダーにとらわれずに自分らしく生きていこうとする気持ちを持つことができる。

低学年では生命の誕生・男女のからだについて、高学年では好きになること(恋愛)が多かった点が特徴で、このほか性の多様性、ジェンダーといったテーマであった。

すべてのグループが模擬授業を希望していたが、時間の都合上、1グループのみに、2009年1月21日に授業をしてもらった。その授業案を次に挙げておく。

テーマ	思春期 ~ 人を好きになる気持ち ~ (小5対象)	
	授業の流れと発問	注意事項など
つかむ	1. 思春期におこる変化について ●目に見える体の変化と、目に見えない心の変化がある。 ②目に見えない変化はどんなものがありますか?	目に見えない変化がとらえにくい時は、物語文を読んだからとらえる。体の変化については前時で「学習済み」なので、本時
(5)	●物語文を読む ②目に見えないものは、気持ちで	

	ある。	では「目に見えない変化」について学ぶことを児童に伝える。
深める (15)	<p>2. 心の変化と、「好き」という気持ち</p> <ul style="list-style-type: none"> ●物語をよみ、主人公の気持ちについて考える。 <small>教</small>なんで主人公のまことはゆきと手をつなぐ時にドキドキしたのでしょうか？ どうしてゆききのことが気になるのでしょうか？みんなもこんな気持ちになったことあるかな？ ●物語の登場人物について考える。 <small>教</small>「まこと」と「ゆきき」について考えてみよう。どんな性格かな。性別はどうか。 	<p>「好き」という気持ちはごく自然なものであり、男女を問わずおこりうるものであるということを理解させる。</p> <p>例としてアメリカでの同性婚の例をあげる。小学生では理解できない。わかりやすいことばで。</p>
広げる (15)	<p>3. 「好き」のかたちについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ●好きという気持ちは同性にも異性にも起こりうるものであるということを理解し、友だちを好き、家族を「好き」と思う気持ちも「好き」の気持ちであることをとらえる。 ●相手に気持ちを伝える時に気をつけることについて考える。 <small>教</small>好きな人ができた時、あなたはどうしますか。 ●相手を「好き」と思うと同時に、相手のことを大切にすることの大切さを理解させる。 	<p>「好き」という気持ちはどんな表し方があるのか、例を挙げて考える。相手の気持ちを考え、大切にすると姿勢を大切にします。</p>
まとめ (10)	<p>4. いろいろな「好き」</p> <ul style="list-style-type: none"> ●紙を切って、色をぬり、「好きの木」を作る <small>教</small>自分の中にはどんな好きがあるかな？みんなもいろんな形や色にしてあらわしてみよう。 ●みんなの木を観察する。 <small>教</small>色んな色があるね。一人一人「好き」はちがうんだね。 ●好きという気持ちは人それぞれであり、好きにはいろいろな形があり、好きになる対象も、なり方も異なるということを理解させる。 	<p>紙を切りぬき、今の自分の「好き」の色をぬる。黒板にはる。</p>

(2) 模擬授業の感想

教員からは、評価できる点として、以下のコメントをした。

○二次性徴のおさえ方は省かれていたが、そこにつながる「好き」という恋愛感情に焦点をあてたことによ

て、実際の5年生が「好き」という気持ちを肯定的に受け止められる授業、「好き」というのは素敵なことで大事な感情だということクラス全員が受け止めることのできる授業だった。恋愛感情の「好き」という気持ちをクラスの中で若い先生がオープンに考える授業をするということは、クラス全体が共有できる「仲間意識」、いいものを作り上げていこうという「協力」・「共有」の気持ち、意志形成ができる授業だった(新崎)。

○一方的に教える授業ではなく、クラスの子どもたちをひきつけ、一緒に作り上げていくという意図が見られた点良かった。絵だけの説明だけでなく、ロールプレイを適所・適度にやっており、子どもたちを飽きさせず、より理解も深まったのではないかと。ことばで「好き」という気持ちはいろいろあるというのは簡単だが、ひとつの作品(「好きの木」)に作り上げることによって、その「いろいろ」という意味が実感として伝わってくるのではないかと(大塚)。

なお、教員からの評価は、以上のようにおおむね好評ではあったが、改善すると良い点として、以下の点が指摘された。

● 模擬授業の前半でおさえたことになっている「二次性徴」という言葉をきちんと確認すると、学びがしっかり活かされる。「自分の気持ちも大事にして相手の気持ちも大事にする」ところを、もう少し違う工夫があると良かった。「いろんな好きがあっという」のはもちろんだが、思春期の「好き」をやる時に、家族を好きとは、共通する部分と違うところがある。「ドキドキ」ということばを使いながら、その違いを伝えようとしていたと思う。小5くらいになると抽象的なことばが理解できつつあり、「恋」・「愛」という新しいことば(概念)を知ることによって自分を振り返っていく。このことばを知ることによって、自分の心の複雑さを含めて自分の心の中で起こっていることをもう一度とらえ直す。このような深みの投げかけのようなことがもう少しあると授業が深まっていった。「クラスのバウム」(「好きの木」)を創る時、イメージさせる問いかけの仕方創るものが違う。授業者の全体の意図として、思春期のドキドキ、気持ちの多様性と同性・異性を越えたところでの恋に近い「ワクワクドキドキ」の大切さを、より伝わる形の問いかけや工夫があると、いっそうよい(木全)。

- 「今日のめあて」で「目に見えない変化」に目を向けようということで、足りなかった点として、内性器の変化（ホルモンも含め）も目に見えない大きな変化。そこを言葉だけでもおさえた上で、今日はこころの好きという変化をやる、というおさえをした方がよりよい（新崎）。……「目に見えない変化」は2つある（からだの中・こころ…木全）。
- 「好き・恋・愛」、難しいかもしれないが、もう少し恋の部分をつっこめると良い。カナダの法案の可決については、小学生対象ではまったく理解できない。あくまでも小学生を対象としたものであれば、もっとわかりやすいことばでやらないと、あの部分は全く生きてこない（松田）。

模擬授業ができなかったグループも、この後、指導案（全員に配布）についてそれぞれ説明してもらった。

最後に教員から、授業は実際にやらないと良し悪しがわからないからこそ、丁寧に振り返ることが大切で、そうすることで教師としての力がつき成長できること（木全）、グループで指導案を作ってもらったが対象学年と内容が実際とあっているかどうか、言葉（精巣・精子など）をどうするか、ということがまだ課題として残ること、大学生相手ではなく実際に小学生を相手に授業をやるのが一番いいが現状では難しいこと（新崎）、をつけ加えた。

(3) 模擬授業後の学生の感想から

教員からの評価と同様、模擬授業を受けた側の学生も、おおむね好評であった。しかし、「まこととゆうきという性別が分からないような名前前で劇を見させていたので、女が男を好き、男が男、女が女もあり得るということが分かった。しかし、もし、5年生だったら、男 男、女 女という意見はなかなか出ないかもしれないと思った」、「服を脱がせる時に『脱がせるね、いーい？』というの聞かなくていいのかな？と思った」という意見もあった。

このほかに、「1つ気になったのが、みんなが多くとりあげている“好き”という感情で、みんなが同性愛についてとりあげていることです。同性愛について、学ばせることはとても大事なことで必要なことだと思います。けれど、その前にやはり、男女間で生まれる“好き”という思いをきちんと学ばせてやるのが大切ではないでしょうか？」というように、当日の模擬授業だけでな

く、他のグループの指導案をも含めた同性愛に関する指導への疑問もあった。

模擬授業をした学生からは、次のような感想があった。

「好き」という気持ちは本当に難しく、今回模擬授業を考えたときも、恋愛の好き、家族愛の好き、友情の好きなどの違いをどう説明して良いのか自分の中で答えが出ず、結局あやふやにしたまま、授業に入ってしまった。今回は思春期についてということで、体の変化と心の変化を2時間構成で授業するつもりだったが、体と心をそれぞれ1時間ずつでやると、内容がとても薄くなってしまおうような気がした（実際にやってみてそう思った）。また、前時まででおさえたいことをしっかりおさえることや、発問の仕方など、自分が考えていなかったことが、授業をしているとどんどん課題として浮かび上がってきた。今日の模擬授業をしっかり振り返り、より効果的な指導ができるようになりたいと思う。

授業を始めるまでは、対象学年が、自分たちが作ったものがあるのか、どうなのか不安でしたが、実際にやってみて感覚とイメージがまた違ったのでやってよかったと思いました。

1つの授業の中でも色々と抜けてしまっていることが多く、教材研究が足りなかったように思います。大切にしたいところが多すぎて、どこを深めていいかが最終的には定まっていなかったように思います。すごく反省点は多かったのですが、とても良い経験になりました。

以上をみると、学生たちは実際に模擬授業をしたことについて肯定的にとらえ、多くのことに気づき、学んだようだった。また、模擬授業をやってみたかった、という学生が感想を見るだけでも複数いた。次年度からは、模擬授業をおこなう機会をなるべく保障していきたい。

2. 半年間の授業を受けた学生の変化

ここでは、毎回の授業後の感想や最終レポートから、学生たちの性（ないし性教育）に対する見方や考え方の変化を概観し、「性の健康」教育の意義を考えたい。

(1) 性教育（あるいは性）に対するイメージの変化

1さんは、「『思春期のためのラブ&ボディ BOOK』を見て、過激ではないか、と思ってしまった」、「これまで講義を受けてきても、どうしてもこういう思いがふっき

れない」(08.10.22)と正直に書いてくれている。私たちは、次時に「感情は自然なもの、どのように感じてもOK」ということをフォローした。

Iさんはその後も「『愛の12段階』というイラストを見て、嫌悪の情を持ってしまった」、「HIVについての知識をそこまで小学生で教えない、ということを知り、正直ホッとしている自分があるのも事実だ」(08.11.19)というように、性を肯定的にとらえようとする努力しつつもできないでいる様子が、感想からうかがえた。

しかし、最終レポートでは、「子どもたちに正しい知識を与え、自分のことを大切に思う気持ちを育てること、これが性教育において教師が持つべき大切なテーマであるということ」を『性の健康』の講義を通じて感じた、「今回私が選んだテーマは『せくす』についてである」、「大人はうまくそれを子どもたちに説明することができない。事実、今私自身ができるかと言えば確固たる自信がない」、「教師も当然、正しい知識と態度を持たなければならない。性に関する勉強は決して恥ずかしがるようなことではない。すてきな大人になるために大事な知識なのである」というように、格闘しながら少しずつ変わっていく様子が見られた。

Sさんは授業の初回に「大人になった今でも、性教育には少し抵抗があるような気がします。“恥ずかしい”とか性に対して前向きになれない気がするので、授業を通して前向きになれるよう努力したい」(08.10.1)と書いていたが、最終レポートでは、「私はこの講義を受講して、改めて性教育の大切さを感じました」、「模擬授業を受けて、すべてが新鮮でなんだか感動しました。最初は恥ずかしい気持ちもありましたが、先生方の話術ですぐに恥ずかしさが吹っ飛び、真剣に取り組むことができました。私が経験してきた授業とは全く違って、大学生の私でもとても勉強になりました」、「一緒に受講していた人たちを見ていても、最初は恥ずかしがっていましたが、授業の回を重ねるごとに性について話し合ったりする機会が増えて、とても充実した時間が過ごせました」と書いてくれた。

Yさんも、初回の感想には「私は小学校の時から、性の学習が大嫌いでした」、「今もまだ少し抵抗があるところもある」(08.10.1)と書いていたが、最終回には「半期のこの授業を受けて、本当に多くのことを学びました。私の嫌いだった性教育も、受け入れることができるようになりました」(09.1.21)と書いてくれている。

同様にKさんも、授業の最初の頃は「性に関してやはり自分なりの価値観や固定観念みたいなものがあります」(08.10.1)と綴っていたが、最後の感想では「半年間、この授業をうけて性に関するとらえ方や考え方が大きく変わりました」(09.1.21)と書いてくれた。

(2) 性に関する知識の不確かさ

また、感想からは、教員養成課程に在籍している大学生ですら、性知識が曖昧であることもわかった。

例えばUさんは、「自分が、女性の内性器について知らないことが多いとも感じた」、「外性器の細かい名称がわかってないから、説明もできないな...と思った」(08.10.1)、また「異性の体のこともきちんと知ることが大切だと思った」、「やたら女性の外性器にくわしいのに、内性器について分かっていない男の人も多いような気がする」(08.11.5)というするどい感想も寄せてくれた。Eさんも、「今日の講義では、今までやってきたのにもかかわらず、はじめて知ることがいくつかでてきた。射精や月経のしくみについても、詳しいことは知らなかったの、へえ~とってしまった」(08.11.5)というように、現在の大学生が受けてきた性教育の貧困さが露呈した。

なお、数少ない男子学生の、「何となく精子はたまっていくものと思っていたが、体中に還元されるということを知り、知識が増えた」(Hさん, 08.11.5)、「精子が運動能力を身につけているのを知り、自分の身体にウニョウニョしているのがいるって思ったらずい少気持ち悪くなった」(Yさん, 08.11.5)という感想からは、男の精子はたまるものだから、放出しなければならない云々といった情報を支えるような感覚、性の知識と自らの「からだ感」との関連も課題として浮き彫りにされた。このほか、インターセックス(半陰陽)、性同一性障害といった、性的マイノリティの人々について興味をもつ者も比較的いた。

(3) 考察

以上の感想・レポートから、科学的な知識を持つことによって、性を肯定的に受け止めるようになる傾向が見えよう。Hさんが「この授業を受けてから性の授業に対する抵抗感は無くなりました。だからラブ&ボディBOOKも不適切な所は無かったと感じることができましたが、もしこの授業を受ける前の自分が読んでいたら

同じように感じる事が出来ていたか、あまり自信がありません」(08.10.22)と感想に書いてくれたように、信頼できる人(例えば教師)から、正しい知識を「知ること」が必要不可欠であるといえよう。

(以上、村瀬)

おわりに：成果と今後の課題

「性教育は、教授法に関する研究の歴史も浅く、創意工夫を重ねながら、実践実例が蓄積されて教授法が発展していくという面があり、教育内容の適否を短期間のうちに判定するのは、容易ではない。しかも、いったん、性教育の内容が不適切であるとして教員に対する制裁的取り扱いがされれば、それらの教員を萎縮させ、創意工夫による教育実践の開発がされなくなり、性教育の発展が阻害されることにもなりかねない」。

2009年3月12日「こころとからだの学習」裁判東京地裁判決(矢尾渉裁判長)では、上記のように、性教育の発展には、試行錯誤の中での創意工夫の必要性が確認された。ここで報告した「性と健康」の実践も、同様である。

成果としては、「調べ学習等で読んだ本では、もっと調べてみたいというものに出会うことができました。自分の性、相手の性を大切にしていくことは子どもたちに学んでもらいたいことだと思います。私自身もこれから自分を大切にしていきたいと思えることができました」、「半期この授業を受けて、本当に多くのことを学びました。私の大嫌いだっ性教育も受け入れることができるようになりました」という学生の感想にみられるように、全体として、好評であり、気づきや学びが深まった内容であったと考えている。私たち自身も、学生の反応や毎回学生に書いてもらう感想文から、模擬授業や講義の内容の更なる改善につながる気づきが得られた。

課題としては、事前、事後の学生の「性と健康」に関する意識の変化を量的にも質的にも評価できるような仕組みを設定しておかなかったために、この講義の相対的で客観的な評価が確実に得られなかったことである。2年目は、1年目のふりかえりを活かしつつ、更なる内容の発展と評価の方法の確立に向けて、実践を積み重ねていきたい。

最後になりましたが、こうした授業実践と報告の機会を与えていただいた松田秀子先生に感謝いたします。

(以上、木全)

【参考文献】

- 名木田恵子作/三村久美子絵『赤い実はじけた』PHP研究所、1999.4
- 松原洋子「明治末期における性教育論争——富士川遊を中心に」『御茶ノ水女子大学人間文化研究年報』第17号、1993
- 吉田英一『劇画山本宣治』機関紙共同出版、1989.3
- 佐々木敏二『山本宣治』上・下、不二出版、1998
- 『新版社会・労働運動大年表』労働旬報社、1995、pp. 194-277
- 橋本紀子、田中秀家「性意識と性教材の社会史」『叢書 産育と教育の社会史2 民衆のカリキュラム 学校のカリキュラム』新評社、1983.10
- 藤野豊『日本ファシズムと優生思想』かもがわ出版、1998.4
- 藤野豊『性の国家管理——買春の近現代史——』不二出版、2001.10
- 藤目ゆき『性の歴史学』不二出版、1998.1
- 田代美江子「近代日本における性教育論の展開とその特質——1920～30年代前半を中心に——」『人間研究』第28号、1992.3
- 田代美江子「娼婦運動と教育」『日本女子大学文学研究科紀要』第三号、1997
- 田代美江子「十五年戦争期における娼婦運動と教育」『差別と戦争』明石書店、1999年
- 田代美江子「性差と教育——近代日本の性教育論にみられる男女の関係性——」歴史学研究会編『シリーズ歴史学の現在9 性と権力関係の歴史』青木書店、2004.4
- 村瀬幸浩「性教育の全体像を描く」『季刊セクシャリティ No. 20 性教育実践2005』エイデル研究所、2005.4
- 文部省社会教育局『社会教育における純潔教育の概況』1967.3
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 総則編』東洋館出版、2008.8
- 文部科学省初等中等教育局教育課程課「新学習指導要領」文部科学省 HP http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/index.htm (2008.8)
- 黒田芳夫「性教育」『学校保健総合事典』帝国地方行政学会、1972.4.
- 山本信弘・大道乃里江・戸田百合子・小山健蔵・須藤勝見「性教育の歴史の変遷の文献的一考察」『大阪教育大学紀要 第1部』第39巻第2号、1991.2、pp. 203-215.
- 島崎継雄「日本の性教育の歩み——戦後の純潔教育を考える」『児童心理』1992.5、pp. 118-123.
- 平林宏美「性教育の現状と課題()——性教育の変遷と現状——」『長野短期大学紀要』第50号、1995.12、pp. 189-201.
- 柳富代「ジェンダーフリー・性教育をめぐる動き」(体育同志会2月例会資料、2008.2.26).